



## 答え合わせ・解説

問1	<b>答え 1</b> <b>愛知県</b>	愛知県は花の産出額が日本一であり、特に渥美半島に位置する田原市などを中心に菊の電照栽培が非常に盛んです。統計上も全国の約37パーセントという高いシェアを誇っています。なお、選択肢にある沖縄県も約10パーセントのシェアを持ち、冬の温暖な気候を利用した電照栽培が行われる主要な産地の一つです。
問2	<b>答え 1</b> <b>新潟県：米、山梨県：果実、長野県：野菜</b>	新潟県は越後平野を中心に日本有数の米の産地として知られ、農業産出額でも米が圧倒的な割合を占めます。山梨県は甲府盆地の扇状地などの水はけのよい地形を利用したブドウやモモなどの果実栽培が盛んです。長野県は、冷涼な高原の気候を活かしたレタスやキャベツなどの野菜（高冷地農業）の産出額が大きくなっています。
問3	<b>答え 1</b> <b>野菜の占める割合が非常に高く、次いで果実の割合も他県に比べて大きい。</b>	長野県は中央高地の冷涼な気候や水はけの良い傾斜地を活かし、レタスやキャベツなどの高原野菜、およびリンゴやブドウなどの果実の栽培が非常に盛んです。そのため、農業産出額の構成を見ると、米が中心の富山県や、畜産の割合が高い地域とは異なり、野菜と果実が大きな割合を占めているのが特徴です。
問4	<b>答え 1</b> <b>自家用車保有台数が多く、消費者物価地域差指数が東京圏に比べて低い傾向にある。</b>	地方圏では、日常生活の足として自動車が欠かせないため、長野県の自家用車保有台数は1世帯あたり約1.97台と、東京都の約0.67台に比べて大幅に多くなっています。経済面では、住宅費などが都市部に比べて抑えられることから、消費者物価地域差指数（物価水準の差を示す指標）が東京圏に比べて低くなる傾向が見られます。これらの指標は、大都市圏と地方圏の生活構造の差を鮮明に示しています。
問5	<b>答え 1</b> <b>黒潮の影響を受けた温暖な気候を活かし、温室などの設備を用いて出荷時期を調整しながら、大消費地へ向けて生産している。</b>	東海地方の太平洋沿岸は、黒潮の影響により冬でも温暖な気候に恵まれています。この気候的条件に加えて、温室やビニールハウスなどの施設を導入することで、植物の成長を早めたり開花時期をコントロールしたりすることが可能になります。こうして生産された農産物は、中京圏や首都圏といった人口の多い大都市（大消費地）へ向けて出荷されます。盆地での果樹栽培は山梨県、冷涼な気候を利用した抑制栽培は長野県などの高地、大規模な畑作は北海道に多く見られる特徴です。
問6	<b>答え 1</b> <b>ファインセラミックス</b>	多治見市周辺を含む岐阜県東濃地方は、良質な粘土に恵まれ、古くから陶磁器（美濃焼）の生産が発展してきました。この「土を焼いて固める」という伝統的な技術を高度化させ、原料の純度を高めたり化学組成を精密に制御したりすることで、熱や摩耗に強い「ファインセラミックス」という先端産業へと発展を遂げました。
問7	<b>答え 2</b> <b>夏でも涼しい高原の気候を利用して、レタスやキャベツなどの野菜を夏から秋に出荷する抑制栽培が行われている。</b>	中央高地の長野県や群馬県の高原地帯では、標高が高く夏でも涼しいという気候を活かし、他の地域では生産が難しい夏から秋にかけてレタス、キャベツ、ハクサイなどを栽培しています。これを「抑制栽培」と呼び、都市部の需要が高まる時期に出荷することで高い収益を上げています。冬の寒さが厳しく氷点下になる中央高地では、温暖な気候を利用する促成栽培やミカン栽培は適していません。
問8	<b>答え 1</b> <b>自然環境の影響を抑え、気温や湿度を管理することで、季節を問わず計画的に作物を生産・出荷できる。</b>	施設園芸農業の最大の目的は、建物によって内部の環境をコントロールすることにあります。これにより、本来の生育時期ではない季節に栽培したり、天候不順による被害を防いだりすることが可能になり、市場の需要に合わせて安定的に出荷できるようになります。選択肢にある「都市に近い立地を活かす」ものは近郊農業、「収穫時期を遅らせる」ものは抑制栽培の特徴を説明したものです。